

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

〈著書紹介〉 新野直哉  
著『現代日本語における進行中の変化の研究-「誤用」 「気づかない変化」を中心に-』

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 新野, 直哉 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00000695">https://doi.org/10.15084/00000695</a>

## 〈著書紹介〉

新野直哉 著

### 『現代日本語における進行中の変化の研究——「誤用」「気づかない変化」を中心に——』

ひつじ研究叢書（言語編）第93巻

2011年2月 ひつじ書房 A5判 x + 404ページ 6,400円 + 税

新野 直哉

国立国語研究所 時空間変異研究系 准教授

## 1. 本書の目的

本書は、現代日本語の「誤用」、そして筆者の造語である「気づかない変化」を中心にした、現代日本語において進行中のさまざまな変化について論じたものである。

言語において「正しい」「誤り」とはどういうことか、というのは容易に結論の出せる問題ではない。本書ではあくまで意味を中心とした言語変化が主題であり、その結果生じた新しい状態の多くは一般に「誤用」と呼ばれる、ということである。本書で使うカギカッコ付きの「誤用」とは、<辞書や「日本語本」（一般向けの、日本語について書かれた本）などで、「このような意味・用法で使うのは誤りである」とされている意味・用法>を指す。

本書は現代日本語の「誤用」を現在進行形の「言語変化」ととらえ、それを学問的・客観的な分析・考察の対象にしたものである。取り上げた「誤用」の各事例について、「良い言語変化」と「悪い言語変化」の区別、すなわち「これは直すべきである」「これは直さなくてよい」といった判断はいっさい行っていない。

## 2. 本書の概要

まず、本書の目次（章レベルまで）を以下に示す。

序章 本書の目的と概要

第1部 現代日本語の「誤用」

第1章 “役不足”の「誤用」について

第2章 “なにげに”について—その発生と流布、意味変化

第2部 「“全然”+肯定」をめぐる研究

第1章 「“全然”+肯定」の実態と「迷信」

第2章 「“全然”+肯定」に関する近年の研究史概観

第3章 各種データベースによる実例の調査結果とその分析

第3部 現代日本語の「気づかない変化」

第1章 “いやがうえにも”の意味変化について—「いやがうえにも盛り上がる」とは？

第2章 “返り討ち”の意味変化について

第3章 “ていたらく”について—「ていたらくな自分」とは？

第4章 “万端”の意味・用法について—今日と明治～昭和戦前との比較

第4部 そのほかの注目すべき言語変化

第1章 “適当”の意味・用法について—「適当な答」は正解か不正解か

第2章 “のうてんき”の意味・表記について

終章 本書をまとめるにあたって

次に、本書の内容について概観する。

まず第1部第1章の“役不足”は、「間違った日本語」の代表格とっていい事例である。これまで、筆者以外にこの語について、用例を分析して「誤用」の生まれた原因・過程を考察するなどして本格的に論じた研究者は、皆無に等しかった。そこで、これまでの筆者の研究をまとめ、さらに新たな用例やそれに基づく考察などを織り込んで書き改めたのが第1章である。「誤用」の初例は昭和一けたにまで遡れること、「誤用」例は“力不足”に置き換える、との従来の指摘は必ずしも適切でないことなどを述べている。

一方、第2章で取り上げた“なにげに”は、1980年代半ばすぎからしばしばメディアに取り上げられるようになった語である。この語について、実例の分析とアンケート結果の考察などの成果をまとめた。

“役不足”“なにげに”のいずれも一般によく知られた事例で、20年以上にわたり「日本語本」やマスメディアで取り上げられていながら、歴史的研究として本格的に論じた研究文献は極めて少ないという共通点がある。

第2部で取り上げた「“全然”+肯定」とは、「全然おもしろい」「全然おいしい」のような、副詞“全然”が“ない”（形容詞、助動詞）・“ず”（助動詞）およびそれらの派生語（“なくす”“なくなる”など）以外の語を修飾している例のことである。この事例も「言葉の乱れ」「間違った日本語」の定番中の定番と呼んでいい。この問題について、筆者がこれまで発表してきた論考を増補のうえ再編集し、第1章～第3章とした。この問題に関する先行文献は、学術論文のみならず、「日本語本」や新聞・雑誌記事など広い範囲に数多く存在する。その内容を整理したうえで、各種データベースを利用して採集した多くの用例を分析した。その結果、「“全然”は本来否定を伴うべき副詞である」という社会一般に流布した「迷信」は、かつてほどではないにせよ依然根強いこと、従来言われてきた「同じ肯定を伴う“全然”でも、戦前のそれは<何から何まで、完全に>の意で、今日のそれは<とても、非常に>の意である」という論は不適切であること、今日の“全然”の被修飾語は形式上肯定であっても、語の意

味あるいは場面・文脈のレベルで必ず「否定」の要素を持っていることなどが明らかになった。その一方で、「迷信」がいつごろどのように生まれ、拡大・浸透したのかを解明するという、大きな課題も残った。

第3部では、現代日本語における「気づかない変化」の事例について論じた。

「気づかない変化」とは筆者の造語である。第1部、第2部で扱った“役不足”“なにげに”“全然”+肯定”などのように、変化が言葉に関心の深い人々の間には広く知られ、「言葉の乱れ」「間違った日本語」の一例としてしばしば槍玉に挙げられる事例がある。一方、第4部第1章で取り上げた“適当”のように、変化していることは広く知られていながら全く「誤用」視されない事例もある。そしてさらに、言葉に関心の深い人々にすら、変化していること自体ほとんど認識されず、言わば「深く静かに」変化が進行していると考えられるものもある。そのような事例が「気づかない変化」なのである。

ヒントとなったのは、方言研究の分野で使われる、「気づかない（「気づかれにくい」「気がつきにくい」などとも）方言」という概念である。これは<使用者が方言ではなく、全国共通語であると思っている方言現象>のことであるが、その中には、同じ語形の語が共通語にもあるが意味がずれている、という場合が多い。

筆者は第1章のもととなった新野(2000:1)において、これを通時的な言語変化に置き換え、

「ある程度進行していながら、日本語学研究者や、「ことばの乱れ」に関する著作を发表するような日本語に関心の深い人々でさえもほとんど気づいていない—仮に気づいていたとしても、少なくとも公に発表された著作の中では指摘していない—意味変化」を、《気づかない意味変化》と呼びたい。

と提案した。たとえばこの論文で扱った“いやがうえにも”は本来<さらにますます>という意味であるが、<不可抗力によって、否応なしに>あるいは<自然に、おのずと>という意味で使われることが多くなっている。しかし「日本語本」などでの指摘はほとんどないし、最新の国語辞書でもそのような意味は「誤用」としても挙げていない。第2章～第4章で扱った“返り討ち”・“ていたらく”・“万端”においても、変化は相当程度進行していながら、やはり指摘する文献は皆無かそれに近いのである。

第4部には、「誤用」とは呼びがたく、「気づかない変化」の定義にも当てはまらないが、現代日本語において進行中である注目すべき変化の事例を、2件収めた。

第1章では、“適当”に着目した。この語は、「適当に答える」というのが<適切に答える>という意味にも<いいかげんに答える>という意味にもなるように、ほぼ正反対の意味で併用されている。この語についての現時点までの調査結果や、他の研究者の文献の概観などを示した。そして、意味変化の経緯は、「あまりとことんやらない方がいいことをくほど

ほどに>しておくこと」を「度をわきまえている」としてプラス評価する場合に限って使われていたのが、「徹底的にやることが望ましいことを<ほどほどに>しておくこと」を「手抜き」としてマイナスと評価する場合にも使われるようになった、と考えられること、マイナス評価の意味の初例は大正末期にまで遡れることなどを述べた。

第2章で取り上げた“のうてんき”は、近世期には主に<向こう見ず>という意味で使われたが、今日では<陽気、楽天的>や<無分別、愚か>、さらに<危機感がない、楽観的すぎる>などさまざまな意味で使われる。また表記にも「能天気」「脳天気」「ノー天気」「ノーテンキ」といったゆれが見られる。それらの現状について各種データベースによる検索の結果などに基づいて論じた。

### 3. 付記

本書は、2009年に東北大学大学院文学研究科に提出した、東北大学審査学位論文(博士)『現代日本語における進行中の変化の研究—「誤用」「気づかない変化」を中心に』に加筆・修正を行ったものである。また、刊行にあたっては、独立行政法人日本学術振興会平成22年度科学研究費補助金(研究成果公開促進費)課題番号225067の交付を受けた。

#### 参考文献

新野直哉(2000)『《気づかない意味変化》の一例「いやがうえにも」について—「いやがうえにも盛り上がる」とは?』『国語学研究』39:1-11.

#### 新野 直哉 (にいの・なおや)

国立国語研究所時空間変異研究系准教授。博士(文学)(東北大学)。宮崎大学教育学部(現:教育文化学部)助教授,国立国語研究所主任研究官,主任研究員を経て,2011年4月より現職。

主な著書・論文:「“役不足”の「誤用」について—対義的方向への意味変化の一例として」(『国語学』175,1993),「“全然”+肯定」について」(『国語論究6 近代語の研究』明治書院,1997),『《気づかない意味変化》の一例「いやがうえにも」について—「いやがうえにも盛り上がる」とは?」(『国語学研究』39,2000)。